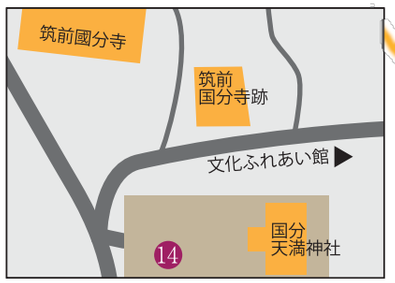

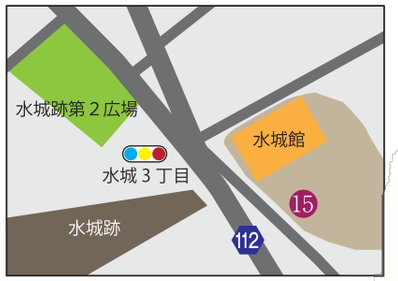

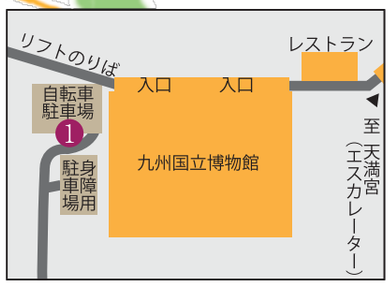

日本で最も古い歌集『万葉集』には約四五〇〇首の歌が集められていますが、その中には大宰府や筑紫で詠まれた歌がなんと約三二〇首もあるのです。なぜたくさんの歌が大宰府の地で詠まれたのでしょうか？

今から約一三〇〇年前の太宰府には、地方最大の役所「大宰府」が置かれていました。外国使節を迎えるという大切な役割を担っていた大宰府には、位の高い役人や教養のある人物が多く集まっていました。大陸や都からの人・ものの流入も相まって、大宰府は文化の交流が非常に盛んな場所だったのです。

万葉集に集められた歌からは、当時太宰府の地にいた人々の姿が見えてきます。四季折々の風景や、酒を愛でる官人たち。大宰府を守る役割を担い、遠く離れた故郷や家族を想う防人たち。都を懐かしむ役人。都に戻るにあたって大切な人との別れを悲しむ人びと。

そして、唐から渡来した梅を見ながら和歌を詠むという、新しい文化も生まれました。大伴旅人によって開かれた「梅花の宴」は、「人々が美しく心を寄せ合う中で、文化が生まれ育つ」という新しい時代の願いを込められて、元号「令和」の典拠となっています。